

地域完結型医療を実践するためには、急性期の速やかな機能回復から生活機能維持・改善、介護・障害予防を目的とした過程で外来・通所理学療法の位置づけが重要となる。本誌では、1995年に「外来理学療法の再検討」を企画し、外来理学療法の役割について示した。その後、医療・介護保険制度の変革に伴い、外来・通所理学療法のあり方が改めて問われている。本特集では外来・通所理学療法の変遷と展望を踏まえ、具体的な実践例を通してその役割と可能性を検証した。

■ 外来・通所理学療法の現状と展望（谷内幸喜論文）

これからの理学療法は、「リハビリテーション前置主義」の理念の下、発症から可能な限り早期に必要なかつ十分な理学療法をより高度な内容（人員配置基準）で、しかも短時間で提供する体制が求められる。それに伴い「医療から介護への連続するシステムの構築」、「リハビリテーションとケアとの境界の明確化」といった維持期リハビリテーションの整備を急ピッチで進めていかなければならない時代に来ている。その要になるのが「外来理学療法」と「通所理学療法」であり、維持期リハビリテーションの存続意義のためにも、今後それぞれの役割（価値）を明確に示していくことが急務である。

■ 整形外科診療所における外来理学療法の現状と展望（杉浦 武，他論文）

診療所は各地域におけるプライマリ・ケアの拠点となる。地域性や専門性などにより診療体系の特性は変化するが、いずれにせよ診療所に求められるニーズは多彩である。理学療法においても、多様な目標に対応すべく、その診療所における専門性と、総合的な知見が必要となる。本稿では、整形外科無床診療所に勤務する理学療法士の立場から、当クリニックにおける外来理学療法の現状を報告し、診療所におけるその役割と今後の展望について考察する。

■ リハビリテーション病院における外来理学療法の現状と展望（草苅尚志，他論文）

当院における外来理学療法患者は年々増加していたが、2006年度からの報酬制度改定に伴い変化がみられてきた。効果判定を繰り返し頻度の変更などを行うべきであったと感じる面もあるが、地域の特徴としてリハビリテーションサービスが不足しており、当院が担ってきた役割も大きかったと感じている。今回の制度改定を良い機会として捉え、患者の生活を再度見つめ直すとともに、理学療法士としての臨床能力向上に努めていきたい。

■ 一般病院における外来理学療法の変遷と展望（川島達宏，他論文）

高齢化により理学療法のニーズが急増する一方、財政難を背景とした診療報酬制度の改定により、理学療法を実施できない患者が増え、ニーズに応えきれない現状がある。現行の診療報酬制度の下では介護保険での理学療法の充実が求められている。早期退院により外来理学療法の役割はさらに重要となり、今後は予防領域での理学療法介入や地域・病院の特色に合わせた専門的な知識・技術を持つ理学療法士が求められるものと思われる。

■ 通所リハビリテーションにおける理学療法の現状と展望（前野由香論文）

2006年4月の介護保険制度改正により、多職種共働でのリハビリテーションマネジメントのプロセスと、退院・退所直後に集中的に関わるリハビリテーションのあり方、新予防給付の新設などが示された。制度改正から1年が経過した当施設での通所リハビリテーションにおける理学療法の取り組みを紹介し、現状と課題を整理した。様々なニーズを持った利用者に対して、通所リハビリテーションが介護予防効果を出していくための理学療法のあり方について提言する。